広島大学大学院教育学研究科紀要　第二部　第51号　2002　401－410

朝鮮時代の日本語学習書の四つ仮名表記について

李　東郁

(2002年9月30日受理)

On the notation of the "Yotsu-Gana" that appear in Japanese learning books of the Chosen Period

Lee Dong-Wook

This paper basing on Japanese learning books of the Chosen Period has the purpose of giving a report on the actual condition of the confusion of the 'Yotsu-Gana' that appear in these materials and the application of it on the history of the Japanese language. Research on the confusion of the 'Yotsu-Gana'is almost solely based on Kana materials, Christian materials or Chinese materials, leaving out a comprehensive research from Korean materials. The approach of one more aspect, namely Korean materials, cannot be left out from the research on the actual condition of the confusion of the 'Yotsu-Gana'. A new approach from this angle will give an opportunity to reconsider already existing various accounts, and at the same time it will give abundant sources to approach the problem of the confusion.

Key word: 'Yotsu-Gana', Korean materials
キーワード：「四つ仮名」，朝鮮資料

1．はじめに

本稿は朝鮮時代の日本語学習書の『捷解新語』原(1676)・改(1748)・重(1781)，『方言類釈』(1778)，『倭語類解』(1785～88・推定)を主な資料とし，そこに表れている四つ仮名混同の実態の報告及び日本語史への適用を行なおうとするものである。

四つ仮名の混同はダ行のヂ・ヅが[dʒi]・[dzu]のような破擦音となり，ザ行のジ・ズの音価に近付いたため起こった現象であり，その事情については従来数多くの論考が発表され，ほぼ明らかにされていると言えよう。しかし，これらの研究は殆ど仮名資料・キリシタン資料・中国資料などを土台にしたもので，朝鮮時代の日本語学習書，つまり朝鮮資料からの総合的な研究は見当たらず，断片的な用例の報告に過ぎないのである。『伊路波』(1492)から『倭語類解』(1785～88・推定)に至る朝鮮資料は15世紀末から18世紀末に至る日本語を表音文字のハングルで記しており，日本語の史的研究において貴重な資料として知られてきた。取り分けタ(ダ)行のチ(ヂ)・ツ(ヅ)の場合はそのハングル転写に，破裂音としてのハングル表記・破擦音としてのハングル表記・四つ仮名の混同例としてのハングル表記が時代の推移とともに表れてきてタ(ダ)行音の破擦音化や四つ仮名の混同等の問題を解明するための好資料となる。にもかかわらず，四つ仮名の混同の説明にこれらの資料が用いられず，放置されてきたことについては疑問である。四つ仮名の混同の実態を調べる上で朝鮮資料というもう一つの方向からのアプローチは欠かせないことで，この方面からの新しい接近は従来の諸説への反省の機会を与えてくれると同時に，混同の実態に近寄らせるより豊富なソースも与えてくれるに違いない。

2．『捷解新語』(原)の四つ仮名表記

朝鮮時代の日本語学習書の内，現存する最古のものとして知られてきた『伊路波』にはタ行子音のハングル表記がすべて破裂音のtで統一されており[1]，そこから本稿の主な考察対象である四つ仮名の混同例を求めることは困難である。そもそも四つ仮名の混同というのは破裂音チ・ツの破擦音化を前提にしなければならないからである。朝鮮資料における四つ仮名の混同

例は『捷解新語』(原)に始まる。『捷解新語』(原)は康遇聖により1676年刊行されたもので，成立はそれより約40年前であるとされている[2)]。『捷解新語』(原)のザ・ダ行音のハングル表記は，ザ行にs～，z～，～n-z～，～n-s～を，ダ行にダ・デ・ドの場合はt～，nt～，～n-t～を，チ・ツの場合はc～，～n-c～を当てており，ジ・ズとヂ・ヅを含むザ行とダ行とが原則として書き分けられているが，その中には四つ仮名の混同が認められるいくつかの用例も確認される。

四つ仮名の混同について触れる前に，一つ指摘しておきたいことは，次に示すようなザ・ダ行に対するハングルの清音表記(s・t・c)の問題である。

かいしやう(海上)	ka-'i-sjo-'u	〈七13ウ〉
ろし(路次)	ro-si	〈一1オ〉
すいぶん(随分)	su-'i-pun	〈一32ウ〉
かすかす(数々)	ka-su-ka-su	〈一3オ〉
おびたたし(夥)	'o-pi-ta-ta-si	〈七2オ〉
ちやま(邪魔)	cja-ma	〈二4ウ〉
みちかい(短)	mi-ci-kka-'i	〈二13オ〉

これらは濁音表記が期待される語に清音表記がなされている例であるが，同一語であっても，「自由」(zi-'ju-'u〈三9オ〉・si-'ju-'u〈八7ウ〉)のように濁音をとるものと，とらないものとがあり，そこから一連の法則性を見出すことはむずかしい。だからと言って，単なる誤りと簡単に片付けるわけにも行かない。清音表記の表れる範囲やその数値などから考えると，やはり一つの問題となる。このような清音表記については，当時の現実音の反映されたものと考えたり，鼻音的要素の衰退と関係付けて考えたり，朝鮮漢字音の影響によるものと考えたりするなど，従来色々な説明が加えられてきた[3)]。この他，語頭に有声子音を持たない朝鮮語や濁音符を持たない本文の仮名遣いなどに引かれた可能性も考えられるであろう。しかし，何れも清音表記の問題の全般に渡る説明には至らず，議論の余地を残している。清音表記の問題は四つ仮名混同の問題とは別に論じられるべき問題であるので，ここで深入りはしないが，今後より精密で総合的な検討が要求される。

本題に戻って，四つ仮名混同例を調べようとすると，上記の清音表記の問題から派生するもう一つの問題，つまり，ジ・ズ・ヂ・ヅに対する清音表記をどのように受け入れ，どのように取り扱うべきかという問題を迎えるようになる。清音表記を当時の現実音の反映されたものと認め，論外のものとして考えることもできるであろうが，本稿では原則としてそれらを濁音形と見なすことにする。四つ仮名混同を調べる上で，もし，濁音の清音表記がその対象から除外されれば，混同例がそこに埋まれることが予想されるためである。ジ・ズ・ヂ・ヅに対するハングル表記は，ジ・ズにs～，z～，～n-z～，～n-s～が，ヂ・ヅにc～，～n-c～が其々用いられ，両者において明確な使い分を見せており，四つ仮名混同を考える上で，濁音の清音表記は大きな問題にならない。以下『捷解新語』(原)から四つ仮名の誤用例と判断されるものを示すことにする。ここでいう総語彙数は四つ仮名混同の可能性を持つ語，つまり同書中のジ・ズ・ヂ・ヅを含むべき語の延べ語数である。なお，タ行オ段幼長音の歴史と関連付けて従来注目されてきた二様のハングル表記「tjo-'u」と「cjo-'u」の内，「tjo-'u」を被るデウ類はヂを含む語と考える。『捷解新語』(改)・(重)，『方言類釈』，『倭語類解』の場合も基本的にはこのような原則に準ずる。

表1．『捷解新語』(原)の四つ仮名表記

		ジ	ズ	ヂ	ヅ	計
和語	総	85	100	69	101	355
	正用	82	96	69	100	347
	誤用	3	4	0	1	8
	誤用率	3.5%	4%	0%	0.04%	2.3%
字音語	総	206	15	28	3	252
	正用	191	15	17	3	226
	誤用	15	0	11	0	26
	誤用率	7.2%	0%	39.2%	0%	10.3%

▽和語

〔ジ→ヂ〕○みぢか(短)〈二13オ，九21オ〉○あんぢて(案)〈四24オ〉

〔ヂ→ジ〕－(用例見当たらず)

〔ズ→ヅ〕○はづ(筈)〈四15オ，五13オ，八19オ，十19ウ〉

〔ヅ→ズ〕○はず(恥)〈五27オ〉

▽字音語

〔ジ→ヂ〕○ぢよ(如)－ぢよさい(如才)〈一21ウ，三26オ，五22オ〉○ぢや(邪)－ぢやま(邪魔)〈二4ウ，四21オ〉○ぢやう(盛)－ぢやうに(盛に)〈三3オ，三27ウ〉○ぢ(字)－りもんぢ(悟文字)〈九5ウ〉○じん(腎)－かんぢん(肝心)〈九11オ〉○ぢやう(状)－しよぢやう(書状)〈十1オ，十10オ〉，ごぢやう(御状)〈十2オ，十11ウ，十13ウ〉，れいぢやう(礼状)〈十33ウ〉

〔ヂ→ジ〕○じ(知)－げじ(下知)〈五4オ〉○じき(直)－じきに(直に)〈一16ウ，一25ウ，二12オ，三25ウ，四30オ，七18オ，九7ウ〉，しやうじき(正直)〈三10ウ〉○べじ(別)－べじ(別)〈十21オ，十26オ〉

〔ズ→ヅ〕－(用例見当たらず)

〔ヅ→ズ〕－(用例見当たらず)

『捷解新語』(原)では，ジ・ズ・ヂ・ヅの歴史的仮名遣いから外れるものが延べ34例(異なり13例)見出される。このような表記のゆれはジ・ヂの混同とズ・ヅの混同によるものと考えられるが，その中でも「あんぢて」(案)・「げじ」(下知)・「はず」(恥)・「べじ」

(別)の場合は，本文に「あんじて」'an-zi-ttjɔi〈八8ウ〉・「げち」kjɔi-ciŋ〈九14オ〉・「はぢ」hoan-ci〈九13ウ，九15オ，九16オ〉・「べち」mpjɔi-ci〈一16オ，一25オ，四18オ，四19オ，十22オ，十22ウ〉のような正用表記も表れており，混乱当時の実相をよく反映している例として注目される。四つ仮名が室町末期から京都でも往々混乱したことは，ロドリゲスの注意するところであり[4]，規範的な立場からこれを区別しようとつとめた大文典その他のキリシタン版にも混同例があり，ことに日葡辞書の標出語にさえ混同した例が見出される[5]ことはよく知られている。『捷解新語』(原)のジ・ズ・ヂ・ヅに対する表記のゆれは，総例の5.6%程と微弱なものではあるが，このような日本語の歴史的現実を背景にして表れたものであろう。

3．『捷解新語』(改)の四つ仮名表記

『捷解新語』(改)は崔鶴齢・崔壽仁たちが中心となり，1748年『捷解新語』(原)を改修刊行したものであるが，改修の主な目的は日朝両国語の変化に起因する『捷解新語』(原)の矛盾を修正することであった[6]。これによると，『捷解新語』(原)の刊行後，約一世紀に渡る日朝両国語の変化の姿が本書に表れているわけであるが，ここでは一先ず四つ仮名表記のみに焦点を合わせて調査を行うことにする。本書のジ・ズ・ヂ・ヅに対するハングル表記は原則として，ジ・ズにs～，z～，～n-z～が，ヂ・ヅにc～，～n-c～が其々用いられており，『捷解新語』(原)の～n-s～が姿を隠したことを除けば，両本における転写原則の異同は見つからない。～n-s～の消滅については日本語の変化と関係付けるより，それまで複雑であったハングル表記への整理作業の結果と解した方が自然であろう。ザ行のジ・ズに対する『捷解新語』(原)のハングル表記には，濁音専用表記のz～と濁音表記の第一方法[7]の～n-s～とが共存しており，その役割の重複性が認められるのである。以下『捷解新語』(改)から四つ仮名の誤用例と判断されるものを示すことにする。

表2．『捷解新語』(改)の四つ仮名表記

		ジ	ズ	ヂ	ヅ	計
和語	総	165	93	21	90	369
	正用	163	83	18	87	351
	誤用	3	10	2	3	18
	誤用率	1.8%	10.8%	9.5%	3.3%	4.9%
字音語	総	193	8	25	1	227
	正用	185	8	14	1	208
	誤用	8	0	11	0	19
	誤用率	4.1%	0%	44.0%	0%	8.4%

▽和語

〔ジ→ヂ〕○みぢか(短)〈二18ウ，九30ウ〉○あんぢて(案)〈四33ウ〉

〔ヂ→ジ〕○じや(助動)〈一44オ，一44ウ〉

〔ズ→ヅ〕○はづ(筈)〈一1ウ，一17ウ，四3ウ，四21ウ，四24ウ，五19オ，八29ウ，九10ウ，十中19オ〉○-づ(助動)〈六12ウ〉

〔ヅ→ズ〕○めずらしい(珍)〈七7ウ〉○さかずき(盃)〈七15ウ〉○あずかり(与)〈七24ウ〉

▽字音語

〔ジ→ヂ〕○ぢ(事)－だいぢ(大事)〈四19オ〉○ぢや(邪)－ぢやしん(邪心)〈九9オ〉○ぢやう(状)－しよぢやう(書状)〈十上1ウ，十中1オ〉，ごぢやう(御状)〈十上3オ，十中3ウ，十中7オ〉，れいぢやう(礼状)〈十下21オ〉

〔ヂ→ジ〕○じき(直)－じきに(直に)〈一24オ，一38ウ，二17ウ，三34オ，四42オ，七27オ，九11オ〉，しやうじき(正直)〈三14オ〉○べじ(別)－べじ(別)〈十中22オ〉，べじでう(別条)〈十中24ウ〉，べじくら(別蔵)〈十下6ウ〉

〔ズ→ヅ〕－(用例見当たらず)

〔ヅ→ズ〕－(用例見当たらず)

『捷解新語』(改)で四つ仮名の誤用例と考えられるものは，和語の「みぢかい」(短)・「あんぢて」(案)・「じや」(助動)・「はづ」(筈)・「-づ」(助動)・「めずらしい」(珍)・「さかずき」(盃)・「あずかり」(与)と，字音語の「ぢ」(事)・「ぢや」(邪)・「ぢやう」(状)・「じき」(直)・「べじ」(別)とが延べ37例(異なり13例)見出される。『捷解新語』(原)の誤用例の内，「ぢやう」(盛)・「じん」(腎)は表れず，「はず」(恥)・「ぢ」(字)・げじ(下知)は正しく修正されているが，一方では「じや」(助動)・「-づ」(助動)・めずらしい(珍)・さかずき(盃)・「あずかり」(与)の新しい混同例も登場する。改修の段階でのこのような新しい混同例の出現は四つ仮名混同の展開様相を考える上で意味深いこと間違いないが，『捷解新語』(原)成立後の約一世紀という歳月を考慮に入れれば，混同の実態が充分に反映されたとは言いにくく，寧ろ『捷解新語』(原)のそれらの踏襲的色彩が濃い。総数から見た混乱の割合は『捷解新語』(原)と大差ない。『捷解新語』(原)の「はず」(恥)・「ぢ」(字)・げじ(下知)の誤用例が正しい仮名遣いに改修されたことからは四つ仮名混同に対する本書の保守的で規範的な改修意図が窺える。

4．『捷解新語』(重)の四つ仮名表記

『捷解新語』(改)は崔鶴齢により再び改修されるが，今日まで伝えられておらず，この第二次改修本を底本にして1781年に重刊したのが『捷解新語』(重)である[8]。本書のジ・ズ・ヂ・ヅに対するハングル表記は

原則として，ジ・ズにs～，z～が，ヂ・ヅにc～が用いられており，『捷解新語』(改)の～n-z～と～n-c～は見られない。中世末期頃の京都語で，濁音が鼻音的要素を伴い，その直前の母音を鼻母音化したことはキリシタンの記述からも周知の事実であるが，ここの～n-z～と～n-c～の消滅は中世の鼻音的要素の喪失と関係があるようである[9]。鼻音的要素の喪失と四つ仮名の混同とは別に論じられるべき問題であるので，ここで深入りする必要はないであろう。以下『捷解新語』(改)から四つ仮名の誤用例と判断されるものを示すことにする。

表3.『捷解新語』(重) の四つ仮名表記

		ジ	ズ	ヂ	ヅ	計
和語	総	136	58	10	74	278
	正用	135	48	9	74	266
	誤用	1	10	1	0	12
	誤用率	0.73%	17.2%	10%	0%	4.3%
字音語	総	180	14	12	0	206
	正用	175	14	7	0	196
	誤用	5	0	5	0	10
	誤用率	2.8%	0%	41.7%	0%	4.9%

▽和語
〔ジ→ヂ〕○あんぢて(案)〈四30オ〉
〔ヂ→ジ〕○すじ(筋)〈四32オ〉
〔ズ→ヅ〕○はづ(筈)〈一1ウ，一16オ，四4ウ，四20オ，四22ウ，六15ウ，九7オ，十上7ウ，十中5ウ，十下6オ〉
〔ヅ→ズ〕－(用例見当たらず)
▽字音語
〔ジ→ヂ〕○ぢやう(状)－しよぢやう(書状)〈十上1ウ，十中1オ〉，ごぢやう(御状)〈十上2ウ，十中3オ，十中6ウ〉
〔ヂ→ジ〕○じき(直)－じきに(直に)〈一22オ，四35オ，七9オ，九7オ〉，しやうじき(正直)〈三13ウ〉
〔ズ→ヅ〕－(用例見当たらず)
〔ヅ→ズ〕－(用例見当たらず)

『捷解新語』(重)で四つ仮名の誤用例と考えられるものは，和語の「あんぢて」(案)・「すじ」(筋)・「はづ」(筈)と，字音語の「ぢやう」(状)・「じき」(直)とが延べ22例(異なり5例)見出される。『捷解新語』(改)の誤用例の内，「みぢか」(短)・「ぢ」(事)・「ぢや」(邪)は表れず，「じや」(助動)・「-づ」(助動)・「めずらしい」(珍)・「さかずき」(盃)・「あずかり」(与)・「べじ」(別)は全て正しい形に改修され，表記上では『捷解新語』(原)・『捷解新語』(改)よりも画然たる四つ仮名の区別をみせている。時期的に前代より深化した四つ仮名の混同が予想される中，期待に背くこのような結果は，現実音の充実な反映というより，混乱していた表記の整理，しかも規範的仮名遣いを手本とする方向への整理を重視した改修意識によるものであろう。調査結果のみをもっていえば，『捷解新語』(改)から見られた保守的で規範的な改修原則は本書で更に厳格に守られたと言えよう。『捷解新語』(原)・(改)・(重)を貫く「あんぢて」(案)・「はづ」(筈)・「ぢやう」(状)・「じき」(直)の存在は仮名遣いへの誤った認識，つまりこれらを正しい形として認識していたことに起因すると考えられる。このように考える以上，本書唯一の新しい混同例の「すじ」(筋)は改修の手落ち，或いは仮名遣いへの誤った認識による混同の反映と考えるしかないのである。仮名遣いへの誤った認識というのも，本質的にはヂ・ヅの破擦音化による四つ仮名の混同を背後におかないと，あり得ないことであろう。

5.『方言類釈』の四つ仮名表記

『方言類釈』は韓語(朝鮮語)・漢語・清語・蒙語・倭語(日本語)の対訳語彙集で洪命福等が正祖二年(1778)に編纂した四巻二冊の筆写本である[10]。本書のザ・ダ行に対するハングル表記は，ザ行の場合は従来のザ行専用表記のz類が用いられず，その代わりにザ・ゼ・ゾにはc～が，ジ・ズにはs～・～n-s～と並行してc～・～n-c～が，ダ行の場合は，ダ・デ・ドにはt～・～n-t～が，ヂ・ヅにはc～・～n-c～が用いられており，ザ行に対するc類の新たな登場が見られる。しかし，c類の新たな登場は新たな問題を伴う。つまり，朝鮮資料における前例のなかったザ行に対するc類表記の結果，ザ・ゼ・ゾのc類とのダ・デ・ドのt類とは弁別的であるが，ジ・ズとヂ・ヅにおいては弁別力を失うようになる。ジ・ズに対するc類の頻出度が相対的に低ければ，四つ仮名混同の反映された誤用例として簡単に考えることもできるであろうが，下記の表4からも確認されるように延べ76例対47例でc類の方がやや優勢である。結局，問題は編纂者たちがジ・ズを表すために原則として用いたハングル表記はc類であったのか，s類であったのかと言うことになるであろうが，本稿の立場から言えば，ジ・ズはs類と対応されるべきではないかと思われる。それはジ・ズに対するs類表記が『捷解新語』(原)に先例がある以上，それの影響を考えないわけにはいかないためである。若し，c類に準じてジ・ズを表したとするならば，逆にs類の存在についての説明に困る。やはりジ・ズはs類のハングル表記と関係付けるべきであろう。そうすると76例という期待以上の四つ仮名混同例について説明しなければならないのであるが，これについては，『方言類釈』の編纂当時は『捷解新語』(原)に比べて四つ仮名の混同が更に深化していた時期であったこと，

本書は見出し語に対する日本語の仮名表記を持たないため『捷解新語』諸本のような仮名の支えが得られなかったこと，ザ・ゼ・ゾに対するｃ類表記にひかれた可能性，編者に係わる問題などのような要因が考えられる。『方言類釈』から四つ仮名の誤用例と判断されるものは以下のようであるが，漢字表題語に対する日本語は仮名表記を持たないため，それに相応しい推定漢字及び仮名を以って示すことにする。

表４．『方言類釈』の四つ仮名表記[11]

		ジ	ズ	ヂ	ヅ	計
和語	総	47	40	30	121	238
	正用	18	23	30	120	191
	誤用	29	17	0	1	47
	誤用率	61.7%	42.5%	0%	0.82%	19.7%
字音語	総	27	9	10	0	46
	正用	6	0	10	0	16
	誤用	21	9	0	0	30
	誤用率	77.8%	100%	0%	0%	65.2%

▽和語

〔ジ→ヂ〕○にぢ(虹)〈一４ウ四箇所〉○ひつぢ(未)〈一6ウ〉○はぢめ(初)〈一７オ，一９オ，二５オ〉○きさんぢ(気散)〈一24オ〉○はぢく(弾)〈二９ウ，二13オ，二27ウ〉○まぢわる(混)〈二32オ〉○なぢり(詰)〈三15オ，三15ウ〉○まぢない(呪)〈三17オ〉○ひつぢ(羊)〈四９オ，四15ウ四箇所，四16ウ〉○くぢか(麝)〈四13オ二箇所，四13ウ〉○ぞんぢ(存)〈四25ウ〉○みぢかい(短)〈四28オ，四29ウ〉○かたぢけ(感激)〈四32オ〉

〔ヂ→ジ〕－(用例見当たらず)

〔ズ→ヅ〕○はづ(筈・弭)－てはづ(手筈)〈一17オ〉，ゆみはづ(弓弭)〈二13オ〉，やはづ(矢弭)〈二13ウ，四２オ〉，しろはづ(城筈)〈二17オ二箇所〉○ねづみ(鼠)〈三13オ，四９ウ，四16オ二箇所〉○みみづ(蚯蚓)〈四18オ〉○すづき(鱸)〈四18ウ〉○づ(助動)〈四33ウ，四34オ，四35オ〉○かならづ(副)〈四30ウ，四31ウ〉

〔ヅ→ズ〕

○かずら(葛)〈四23ウ〉

▽字音語

〔ジ→ヂ〕○ぢう(十)－ぢうご(十五)〈一８オ二箇所〉，ぢうがち(十月)一８オ二〉○ぢつ(日)－ぼくぢつ(伏日)〈一８オ〉，さくぢつ(昨日)〈一８ウ〉○ぢ(至)－とうぢ(冬至)〈一８オ〉○ぢ(時)－ぢぶん(時分)〈一９オ〉○ぢ(事)－つうぢ(通事)〈一32オ〉○ぢき(食)－こぢき(乞食)〈一35オ，三17ウ〉○ぢ(字)－みょうぢ(名字)〈一36オ二箇所〉，もんぢ(文字)〈二６ウオ〉，ふみぢ(文字)〈二６ウオ二箇所〉○ぢょう(症)－さんぢょう(疝症)〈三３ウ〉○ぢょう(生)－ようぢょう(養生)〈三６ウ〉○ぢょう(状)－しょぢょう(書状)〈三14ウ〉○ぢ(磁)－ぢしゃく(磁石)〈三19ウ〉○ぢ(自)－ぢてん(自然)〈四30オ〉○ぢょう(情)－ぢょうぶん(情分)〈四32オ〉

〔ヂ→ジ〕－(用例見当たらず)

〔ズ→ヅ〕○づ(主)－ぼうづ(坊主)〈三16ウ二箇所，三17オ四箇所，三17ウ二箇所，三18オ〉

〔ヅ→ズ〕－(用例見当たらず)

『方言類釈』では四つ仮名の誤用例と考えられるものが延べ77例(異なり34例)見出され，同時代の『捷解新語』(重)に比して総語彙数に対する混同率が，4.5%から27.1%と急増している。このような違いはそもそも『捷解新語』(重)の保守的で規範的な改修原則にその原因があるのであり，ここの「急増している」という言い方は適切でないようである。四つ仮名混同の歴史的展開と『方言類釈』の編纂時期を考慮に入れて考えてみれば，このような混同率は寧ろ当然のことであるかもしれない。ハングル表記において前述したような問題が係わるので，混同の細細とした反映までは期待しがたいものの，全体としての混同の反映は首肯できよう。ハングル表記の問題も究極的には四つ仮名の混同という日本語の現実によるものであるからである。少なくとも本書では『捷解新語』(改)・(重)で改修原則として働いた規範意識という妨害物は考えなくてもよさそうである。

６．『倭語類解』の四つ仮名表記

『倭語類解』は漢学書の『訳語類解』(1690)と同一の体系を持つ語彙集で，成立時期は18世紀初期，刊行時期は18世紀末期と推定されている[12]。しかし，『倭語類解』をいつ頃の資料として扱うべきかということは問題となる。『倭語類解』は従来18世紀初期の資料としても，18世紀末期の資料としても考えられ，資料の取り扱い上，混乱を来たしてきたのが事実であるが，大友信一・中村栄孝・安田章・宋敏・郭忠求[13]らの研究が重なり，近年になっては18世紀末期の資料として考えるのが主流であると言えよう。これに関連して安田章[14]は次のように述べている。

> 従来，『倭語類解』は刊行期の未詳のまま，洪舜明編纂と言うことの関連で，彼の活動時期として『通文館志』にその干支の記された，1701年から1709年前後をそれほど距たることのない18Ｃ初葉の言語資料として処理されてきたのが実情である。（中略）しかし，成立経緯はさておき，言語資料として，讐整される以前の写本でなく，刊本を用いる以上，厳密には刊行期たる18Ｃの極末葉のものとして見なければならないであろう。

このような理由で本稿では18世紀末期のものとして考えることにする。本書のジ・ズ・ヂ・ヅに対するハングル表記は，ジ・ズにはz～・ŋz～・s～が，ヂ・ヅにはc～・ŋc～・nc～・～n-c～とジ・ズ専用のz類が表れる。ヂ・ヅの場合はｚ類の占める数値が圧倒的で

あり，解決すべき問題は残るけれども，前代からヂ・ヅを表すために用いられたc類が表れることから，一先ずここではヂ・ヅに対するz類表記を誤用例と考え，調査を進めることにする。『倭語類解』から四つ仮名の誤用例と判断されるものは次のようであるが，本書は漢字表題語に対する日本語の仮名表記を持たないため，それに相応しい推定漢字及び仮名を以って示すことにする。

表5．『倭語類解』の四つ仮名表記[15]

		ジ	ズ	ヂ	ヅ	計
和語	総	31	38	24	80	173
	正用	30	37	7	20	94
	誤用	1	1	17	60	79
	誤用率	3.2%	2.6%	70.8%	75.0%	45.7%
字音語	総	213	7	26	6	252
	正用	211	7	4	0	222
	誤用	2	0	22	6	30
	誤用率	0.93%	0%	84.6%	100%	11.9%

▽和語

〔ジ→ヂ〕○ひぢり(聖)〈上22オ〉

〔ヂ→ジ〕○ぢじ(祖父)〈上12オ〉○じかづき(近付)〈上13ウ〉○うじ(氏)〈上14オ〉○かじ(鍛冶)〈上15オ〉○ひじ(臂)〈上17オ二箇所〉○すじ(筋)〈上18オ〉○こうじ(麹)〈上47オ〉○あじ(味)〈上48ウ〉○かじ(柁)〈下18オ〉○くじら(鯨)〈下25ウ〉○かじ(梶)〈下28オ〉○ふじ(藤)〈下28ウ〉○ちじまる(縮)〈下32オ〉○はじ(辱)〈下32ウ，下45ウ〉○なんじ(汝)〈下44ウ〉

〔ズ→ヅ〕○いしづえ(礎)〈上32オ〉

〔ヅ→ズ〕○いかずち(雷)〈上2オ〉○いなずま(電)〈上2オ〉○みず(水)〈上7オ二箇所，上8オ，上9オ五箇所，上9ウ五箇所，上10オ四箇所，上10ウ二箇所，上38ウ，下8オ，下14ウ，下46オ〉○いずみ(泉)〈上9オ，下48オ〉○くずれ(崩)〈上26オ，下36ウ〉○いずる(出)〈上29オ〉○なずる(撫)〈上31オ〉○とじる(閉)〈上32ウ〉○つずみ(鼓)〈上43オ二箇所〉○ずけ(漬)〈上47ウ〉○なまず(癜)〈上51オ〉○きずく(気付)〈上51ウ〉○うずむ(埋)〈上52ウ〉○あずき(小豆)〈下4ウ〉○なずな(薺)〈下5ウ〉
○ほおずき(酸漿)〈下7ウ〉○つずら(葛篭)〈下12オ〉○おしまずき(机)〈下12ウ〉○さかずき(杯)〈下13ウ〉○ずな(綱)〈下15ウ二箇所，下17ウ，下18オ〉○かなずち(鎚)〈下16オ〉○けずる(削)〈下17オ〉○うろくず(鱗)〈下25ウ〉○かわず(蛙)〈下27オ〉○かずら(葛)〈下31オ〉○あずける(授)〈下36オ〉○つずけ(連)〈下36オ三箇所〉○わずか(僅)〈下42オ〉○わずろう(煩)〈下46ウ〉○おとずれ(訪)〈下47オ〉

▽字音語

〔ジ→ヂ〕○ぢゅう(従)－さいぢゅう(再従)〈上13オ〉○ぢょう(状)－とうぢょう(答状)〈上37オ〉

〔ヂ→ジ〕○じょ(女)－しょくじょ(織女)〈上1ウ〉，じょそく(女息)〈上13オ〉，ちつじょ(姪女)〈上13オ〉，れつじょ(烈女)〈上14オ〉，ろうじょ(老女)〈上15ウ〉，じょぎ(女妓)〈上15ウ〉，げじょ(下女)〈上15ウ〉，しょじょ(処女)〈上41ウ〉，じょ(女)〈上42オ〉○じょ(除)－じょせき(除夕)〈上4ウ〉，じょや(除夜)〈上4ウ〉○じょ(条)－やくじょう(約条)〈上26ウ〉○じゃく(着)－じゃく(着)〈上46ウ〉，じゃくぎ(着碁)〈下19ウ〉，しんじゃく(襯着)〈下47オ〉○じゅう(頭)－まんじゅう(饅頭)〈上47オ〉○じょう(趙)－じょう(趙)〈下1ウ〉，じょうこく(趙国)〈下1ウ〉○じゅう(重)－じゅうばこ(重箱)〈下12オ〉○じく(軸)－じく(軸)〈下30オ〉○じき(直)－じきに(直)〈下42ウ〉○じょう(定)－けつじょう(決定)〈下48オ〉

〔ズ→ヅ〕－(用例見当たらず)

〔ヅ→ズ〕○ず(途)－いちず(いちず)〈上23ウ〉○ず(図)－さしず(指図)〈上25ウ〉○ず(頭)－ずきん(頭巾)〈上45オ二箇所〉，ずふう(頭風)〈上50オ〉，ずつう(頭痛)〈上50オ〉

『倭語類解』では四つ仮名の誤用例と考えられるものが延べ109例(異なり62例)見出されるが，109例の誤用例の内105例(異なり58例)がヂ・ヅに集中しており問題となる。ところが，このような偏重現象の原因は巻末に附載されている「伊呂波間音」から答えを求めることができそうである。次の「伊呂波間音」からもわかるように，

ŋka○ka-'a 間 ŋki○'i-ki 間 ŋku○'u-ku 間
ŋkjɔi○kjɔi-'jɔi 間 ŋko○'o-ko 間 mpa○ma-pa 間
mpi○mi-pi 間 mpu○mu-pu 間 mpjɔi○mjɔi-pjɔi 間
mpo○mo-po 間 za○sa-'a 間 zi○si-'i 間
zɯ○sɯ-'ɯ 間 zjɔi○sjɔi-'jɔi 間 zo○so-'o 間
nta○ta-na 間 ntɔi○nɔi-tɔi 間 nto○no-to 間

ダ行のヂ・ヅに対するハングル表記が抜けている。「伊呂波間音」は音韻論的に有声・無声の対立を持たない朝鮮語の干渉により日本語の清濁の区別に非常に苦労したと考えられる日本語学習者のため，その基準と言うべき発音及び表記法が添付されたものと推測されるが，そこにヂ・ヅに対する説明が除外されていることは示唆するところ大きい。これは意図された漏れであり，そこには四つ仮名に対する編者の態度が如実に表れていると言えよう。つまり，本書の編者は四つ仮名混同の進展の結果をヂ・ヅ→ジ・ズという方向で受け止めたことになるのである。このように考えれば，先程述べた本書の四つ仮名混同例の偏重現象は無理なく説明できると思われる。しかし，ここにおいてもう一つ問題になるのは，「伊呂波間音」と題して提示された基準から外れる述べ35例(異なり18例)のc類表記をどう解すべきかということである。「倭語類解考」(1959)では，「伊呂波間音」は朝鮮語に現われることのない有声頭子音用であり，語中濁音にまで及ぼされることは必ずしも一般的ではなかったという解釈を加えているが[16]，ジ・ズに対するz類表記とヂ・ヅに対するz類表記が語頭・語中を問わず出現していること，

ぢじ(祖父)ŋci-zi〈上12オ〉・ぢょう(場)cjo-'u〈上34ウ〉のような語頭のｃ類表記等を考え合わせれば，ジ・ズ・ヂ・ヅに対するｚ類表記がそうであったとは言い切れない。全体を通じて「伊呂波間音」に示された基準から外れるものは多数見られるため，その基準が絶対的なことであったとは言えない。必要に応じてその基準から外れることが許される場合もあったのである。先程挙げたヂ・ヅに対する35例のｃ類表記はこの延長線上から考え得るであろう。表記法としての基準と言うべき「伊呂波間音」に逆らわなければならない理由について簡単に決め付けることはできないが，やはりヂ・ヅに対するｃ類表記は『捷解新語』諸本のそれと同一なものと考える外は代案がなさそうである。ヂ・ヅ→ジ・ズという統一意識の中，何らかの形で依然として区別のついていた一部の現実音の反映されたものとして考えることもできるであろう。

7．調査結果からみる四つ仮名混同

四つ仮名混同が室町末期の文献資料から散見されることやロドリゲスの「Gi(ヂ)の代りにIi(ジ)と発音し，又反対にGi(ヂ)と言ふべきところをIi(ジ)といふのが普通である」と言う記述等によると，京都におけるジ・ズとヂ・ヅとの混乱は室町末期に始まり，江戸初期に入って急速に広がったと考えられる[17]。

前掲の『捷解新語』(原)の四つ仮名混同例はジ・ズ・ヂ・ヅのこのような音声的事情を背景にして表れたもので，その頻出度のみをもって考えれば，混乱の初期のものと分類することができよう。『捷解新語』(原)の調査結果から先ず注目されるのは，表１からも分かるように，総混同数の字音語・和語別の混同率において，字音語のジ・ヂへの大きな偏重が窺えることである。字音語のジ・ヂの混同が，字音語のズ・ヅ・和語のジ・ヂ・和語のズ・ヅに比べて著しいということは，四つ仮名混同の進み方を考える上で非常に示唆的なことで，字音語のジ・ヂの方から混乱が先に進んでいたという推測を可能にする根拠となる。四つ仮名の混同においてジ・ヂの方がズ・ヅの方より先行していたことは混同の直接的原因となるチ(ヂ)・ツ(ヅ)の破擦音化がチ(ヂ)の方から始まったことからも容易に考えられるところである。チ(ヂ)の破擦音化が先に始まったことは既に有坂秀世により指摘されたことがある。彼は万葉集巻二十防人歌の中から武蔵・下総・常陸・下野四個国の歌を検討した上，標準語の知類相当の位置に斯類の仮名の出て来る例が十八まであり ながら，多(佐)都(須)弖(勢)斗(蘇)登(曾)諸類の確実な例一つも出て来ないこと，土佐の或る方言ではツ・ヅは未だtu・duに近い音を持っているが，チ・ヂは頭音が既に一種のアフリカータとなっていること，頭音tのアフリカータ化される為に最も都合のよい条件に在るものはtiであること等から類推して，東国においてチ(ヂ)の頭音のアフリカータ化が，ツ(ヅ)の頭音のアフリカータ化より一足先に起こったことを推測したのである[18]。音韻変化の一般的傾向から考えてみても口蓋母音/i/を有するチ(ヂ)の破擦音化がツ(ヅ)の破擦音化に優先した方がより自然であろう。ジ・ヂの混同がズ・ヅ混同に比べて顕著なことは『天草版平家物語』[19]・寛永版『醒睡笑』[20]からも確認されるが，北原保雄はこのような事実が『三河物語』・『きのふはけふの物語』に於いても同様であることを指摘し，慎重な立場から「四つ仮名の混乱のうち，「づ」と「ず」との混乱は，「ぢ」と「じ」とのそれに対して，比較的遅れて生じた」という解釈を加えている[21]。一方，倉島節尚は北原保雄のこのような論をうけ，咄本『杉楊枝』の例を手懸かりにして，ヂ・ジの混同が字音語に偏っていることやその理由についてまでその視野を広めていったが，彼はその理由を，和語の場合は仮名書きされることが多い反面，字音語の場合は通常仮名書きを持たなかったことやジ・ヂを含む字音語の方がズ・ヅを含むそれより遥かに多いこと等から求めようとした[22]。ジ・ヂの混同がズ・ヅ混同に比べて顕著なことはツ(ヅ)よりチ(ヂ)の方が破擦音化しやすい音声的条件にあったことから説明がつくであろうが，ジ・ヂの混同が特に字音語に集中されることになるとこれのみでは説明しにくい。こうなると音声的条件に加わる別の要因を考えなければならないのであるが，この時倉島節尚の説明は有効である。『捷解新語』(原)の四つ仮名混同における字音語ジ・ヂへの偏重現象は従来の報告とも共通するところであるが，これらを拠り所にして四つ仮名混同の進み方について考えるならば，四つ仮名混同の初期段階においては字音語のジとヂとの混同が優位に立っていたことが考えられる。これはジ・ヂの方がズ・ヅより破擦音化しやすい音声的環境にあったこと，仮名書きされることが和語の場合は多く字音語の場合は少なかったこと，ズ・ヅを含む字音語の方がジ・ヂを含む字音語より遥かに少ないことなどの要因が複雑に働いた結果であろう。字音語のズ・ヅが総語彙数及び総混同数において字音語のジ・ヂ，和語のズ・ヅ，和語のジ・ヂに比して絶対劣勢を見せることは表１～５の本考察の結果からも確認される。

四つ仮名の仮名遣いを説いた書物として有名なロドリゲスの『日本大文典』(1604)・三條西實條が1626年に伝授したと言う『假字遣近道抄』・荒木田盛徴の『類字假名遣』(1665)・契沖の『和字正濫鈔』(1693)・

鴨東萩父の『蜆縮涼鼓集』(1695)等[23]によれば，『捷解新語』(改)・(重)の当時は時期的に四つ仮名の区別の乱れることが一層期待されるが，調査結果はその期待に反する。総数から見た『捷解新語』(改)の混乱の割合は『捷解新語』(原)と大差なく，『捷解新語』(重)の場合は寧ろ『捷解新語』(原)・『捷解新語』(改)よりも画然たる四つ仮名の区別をみせている。これは『捷解新語』(原)に於ける混乱していた表記の整理，しかも規範的仮名遣いを手本とする方向への整理を重視した改修意識に原因があるであろう。やはり，『捷解新語』(改)・(重)をもって四つ仮名混同の詳細な事情を論じることは無理を伴うが，『捷解新語』(改)での新しい混同例については一つ言えそうである。規範的仮名遣いを重視する改修原則により，『捷解新語』(原)の誤用例の「はず」(恥)・「ぢ」(字)・げじ(下知)類が正しく修正される中，新しい混同例として登場した「じや」(助動)・「-づ」(助動)・めずらしい(珍)・さかずき(盃)・「あずかり」(与)類は，改修の手落ち或いは仮名遣いへの誤った認識等に助けられ，四つ仮名混同の実相が反映されたものと解されるが，その全てが和語であることは目を引く。充分な傍証をもって固めなければならないが，これは字音語のジ・ヂの混同に比して劣勢であった和語のジ・ヂ，和語のズ・ヅに於ける混同の拡散を思わせるところである。四つ仮名の総混同数に対する字音語・和語別の混同率において『捷解新語』(原) の字音語ジ・ヂへの偏重現象が『捷解新語』(改)・(重)・『方言類釈』・『倭語類解』を経て顕著に減少することは，和語のジ・ヂ，和語のズ・ヅに於ける混同の拡散と関係付けて考えるべきであろう。

『方言類釈』・『倭語類解』の総語彙数に対する四つ仮名混同は『方言類釈』が27.1%，『倭語類解』が25.6%を占めており，『捷解新語』(改)・(重)に比べて急増している。しかし，このような違いはそもそも『捷解新語』(改)・(重)の保守的で規範的な改修原則に原因があることであり，四つ仮名混同の歴史的展開や『方言類釈』・『倭語類解』の編纂時期等を考え合わせれば，両書の四つ仮名の混同率はある程度納得の行くところである。『方言類釈』・『倭語類解』の四つ仮名表記を一覧する時，問題になるのは，ジ・ヂ，ズ・ヅの混同に於ける混同の方向であろう。表4，表5からも分かるように，『方言類釈』ではジ・ズ→ヂ・ヅの傾向が，『倭語類解』ではヂ・ヅ→ジ・ズの傾向が絶対的であり，四つ仮名混同の方向において相反する傾向を見せるためである。四つ仮名混同の方向についての説明は従来二分されてきたが，亀井孝が「蜆縮涼鼓集を中心に見た四つがな」[24] の中でヂ・ヅ→ジ・ズの可能性について説き，大友信一[25]がこれに反論を提起したのがそれである。亀井孝は四つ仮名に関連する『蜆縮涼鼓集』(1695)の記述に基づき，ヂ・ヅ→ジ・ズの可能性について説き，その原因としては次のようにヂ・ヅの鼻音的要素(Initial glide の鼻音)の衰退を挙げている。

> 江戸時代の最初期において，語中のガ行音およびダ行音は，それに先行する音節の母音を鼻音化する力を有してゐたのである。ただし，この鼻母音の存在は，当時，かなり微弱なものであったらしい。そして，これを歴史的にみれば，恐らく衰退の途上にあったものであらう。そこで，もし江戸の初期にこの現象が滅びて行ったとすれば，それによって四つがなは，最後の混一へ思ふままに突進し得たこととなる。ダ行音において，それに先行する鼻腔の共鳴が存してゐるかぎり，ヂ・ヅはかかる鼻音的色調に妨げられて，[d] の部分を脱落せしめがたかったのである。けだし，かかる鼻腔の共鳴は，母音を鼻音化すると同時に，軽微な [n] をもって，[d] を修飾したことであらうから。したがって，変化の方向としてジズへマ混じて行ったものと解することは容易である。鼻母音の衰退が，閉鎖音の緊張の弛緩を促進したとみるのは，自然だからである。（中略）以上によって，われわれは，四つがな混同の結果が当時いかなる音価の音韻に帰したかを窺知し得るであらう。京都の大勢は，けだし帯擦音の閉鎖を脱落せしめてこれを摩擦音の「ジ」「ズ」に合わせ，その結果 [ʒi] [zu] の二種としたのである。しかるに，撥音につづく場合に限り，却って，「ジ」「ズ」を [dzi] [dzu] と発音したのである。(亀井孝の前掲論文による)

一方，大友信一は，ヂ・ヅに於けるInitial glide の鼻音の衰退が閉鎖音の緊張の弛緩を促進し，結果的にヂ・ヅ→ジ・ズという混同を招いたとする亀井孝のこのような論に対し，混同の例を検討してみる時，必ずしも，ヂ・ヅがジ・ズに一方的に混同しているわけでないこと，朝鮮資料・中国資料からザ行音，バ行音にもInitial glide の鼻音の存在が確認されること等を挙げて，一方的にヂ・ヅがジ・ズに混同する事は考えられないという論旨を発表している[26]。つまり，彼はInitial glide の鼻音は四つ仮名混同を阻止したのではなく，却ってその混同を促進させる方向に働いたと考えたのである。大友信一の検討した四つ仮名混同例は概して混乱初期のものが多いが，混乱初期の資料とも言うべき本稿の『捷解新語』(原)やそれを引き受けた『捷解新語』(改)・(重)からもやはりヂ・ヅがジ・ズに一方的に混同した痕跡は見られない。ところが，これはあくまで混同の初期段階のことであり，混同が深まった時のことになると，事情は変わる。混同の深化の結果，一つの方向へ統一しようとする気運が高まる

のは，音変化の一般的な現象として自然なことであろう。実際，このような傾向は『方言類釈』・『倭語類解』・『醒睡笑』[27]・『杉楊枝』[28] 等の混同例からも確認される。絶対的な統一は期待し得ないけれども，一つの流れとしての移動は予想されるのである。この際，ジ・ズ・ヂ・ヅに於いてInitial glideの鼻音がいかなる方向に働いたかを究明するのは決して簡単ではないが，少なくとも，京都における混同の方向はヂ・ヅ→ジ・ズのようなものであったことは，日遠の「法華経随音句」(1620)に「水」を「ミス」，「紅葉」を「モミシ」とする誤謬が指摘されていることや鴨東萩父の『蜆縮涼鼓集』(1695)に「言替る時は，其音　悉，其字に違へり」の例として示されている「八軸」・「空地」・「七頭」・「命鶴」類の全てがヂ・ヅを含む語であることや次のような契沖の記述[29]等からうかがい知ることができる。

> 右ちよりこなたの四もし。都方の人の常にいふは。ちの濁りはじとなり。つはずとなる。田舎の人のいふは。じはぢとなり。ずはづとなる。ぢとづとはあたりて鼻に入るやうにいはざれはかなはず。
>
> (亀井孝の前掲論文による)

以上によれば，ヂ・ヅ→ジ・ズの混同の方向は認められるべきであろう。ダ行とザ行の内，変化の始まったのは，破擦音化の起こったダ行の方であり，ダ行のヂ・ヅは安定しておらず，ザ行のジ・ズに引かれやすかったことも考え得る。両者の内，一方が必然的に変化の道を歩まなければならない音声的条件にあったとしたら，ジ・ズからの新たな変化より，破擦音化に続くヂ・ヅからの度重なる変化の方が音変化の流れとして自然であろう。このように考えて来れば，『倭語類解』でのヂ・ヅ→ジ・ズという混同の傾向は四つ仮名混同の発展過程によく符合するところであり，無理なく説明できる。これは音韻論的に有声・無声の対立を持たない朝鮮語の干渉により日本語の清濁の区別に非常に苦労したと考えられる日本語学習者のため，その基準と言うべき発音及び表記法が記された「伊呂波間音」にヂ・ヅに対する説明が除外されていることからもすでに予見されるところである。しかし，現代日本語に於けるジ・ズ・ヂ・ヅの音価を調べてみると，[dʒi]・[dzu] の方が [ʒi]・[zu] より優勢となっており，今までの考察とは相反するジ・ズ→ヂ・ヅという混同の方向が予想されて問題が複雑になる。今日のジ・ズ・ヂ・ヅの音価については，ジ・ズ・ヂ・ヅが語頭にある場合や撥音のンの直後にある場合は [dʒi]・[dzu] になり，それ以外の場合には [ʒi]・[zu] となるという説[30]，日本人は純粋な摩擦音を発音することが大変困難であり，[z] のかわりに語中とて [dz] を発音してしまうのが普通であるとする説[31]が見られるが，いずれにしても [dʒi]・[dzu] の方が優勢である。ところで，この問題は当時の中央語であった京都方言の場合と現代共通語の母体となった関東方言の場合を区別して，つまり方言的要素を視野に入れて考えるべきである。ここで先ず想起させたいのは「田舎の人のいふは。じはぢとなり。ずはづとなる。」という契沖の前掲の記述である。ここの「田舎」はいったい何処を指すのかということが問題の核心になるであろうが，次ぎの『蜆縮涼鼓集』(1695)の記述によれば，ある程度明瞭になる。

> 其証拠を挙ていはば，京都，中国，坂東，北国等の人に逢て其音韻を聞に，総て四音の分弁なきがごとし。唯，筑紫方の辞を聞に，大形明に言分る也。一文不通の児女子なりといへ共，強に，教る事もなけれども，自然に聞習ひて，常々の物語にも，其音韻を混乱する事なし。
>
> (亀井孝の前掲論文による)

「筑紫方の辞」においては四つ仮名を混乱する事がなかったという記述から，契沖のいう「田舎」とは，筑紫方，中国，京都等のような関西地方より，坂東，北国等のような関東地方を指したものと考えられる。四国方面はどうであったかということになると，時期的に多少遅れるが，橋本進吉の紹介した石原正明の『年々随筆』(1800年頃)に「九州四国の人の物云ひにはちとしとつとすとの濁音おのづからわかるといふ」とあり[32]，これによって四国にも其の区別があったことがわかる。すると，当時の四つ仮名区別の方言的分布は今日のそれと殆ど一致することになり，現代共通語の四つ仮名に於ける [dʒi]・[dzu] の優勢現象についても自然に説明がつく。以上のことによれば，人の受け止め方の違い・語彙による遅速差などによる多少の個別的違いはあるものの，地域差による上記のような全体的違いは認められる。大友信一や亀井孝のいうInitial glideの鼻音は，地方によってその働きの方向が一定していなかったかもしれない。四つ仮名混同の結果がこのようになるまでには，地域差に起因する音声的条件の違い・Initial glide 鼻音の衰退時期の違い・破擦音化時期の違い等の要因が複合的に関与したと考えられる。最後に残る問題は『方言類釈』のジ・ズ→ヂ・ヅという混同の傾向についてであろう。この問題については，『方言類釈』の場合を関東方言の反映されたものとして考えれば，筋道がよく通るのであるが，『方言類釈』と系譜を共にする朝鮮資料が従来京都附近の方言や九州方言と関係付けて述べられてきたこと[33]，日本語の習熟度の完全でない朝鮮人によって集録されたこと[34]等を考え合わせれば，関東方言との関

係付けより，前述したような四つ仮名に対する編者の知識及び受け止め方に係わる問題，ザ・ゼ・ゾに対するｃ類表記にひかれた可能性，仮名の支えがなかったことなどからその要因を求めた方がよさそうである。

7．おわりに

以上のように『捷解新語』（原）・（改）・（重）・『方言類釈』・『倭語類解』から見られた四つ仮名混同例を提示し，それらの分析に基づき，混同の詳細についての検討も進めてきた。『捷解新語』（改）・（重）に於ける規範的な改修意識や『方言類釈』に於ける編者及びハングル表記に係わる問題等が指摘され得るであろうが，以上の資料は全体として何れも四つ仮名混同の豊富な実例を有しており，四つ仮名混同の進み方を考える上で，好資料であるということは間違いないであろう。取り分け，『捷解新語』（原）において総混同数の多くが字音語のジ・ヂに偏重していることや『倭語類解』の「伊呂波間音」にヂ・ヅに対する説明が除外されていること等は意味するところ大きいと考えられる。

【注】

1）ハングルのローマ字転写は，多和田眞一郎（1997）『外国資料を中心とする沖縄語の音声・音韻に関する歴史的研究』武蔵野書院による。
2）森田武（1955）「『捷解新語』の成立時期について」『国語国文』24-3，京都大学国文学会
3）森田武(1973)「捷解新語解題」『三本対照捷解新語釈文・索引・解題編』京都大学文学会
安田章（1973）「重刊改修捷解新語解題」『三本対照捷解新語釈文・索引・解題編』京都大学文学会
安田章（1979）「『方言集釈』の日本語表記」『国語国文』48-1
趙堈熙（2001）『朝鮮資料による日本語音声・音韻の研究 新日本語学研究叢書４』 제이엔씨（Korea）pp.223-224
4）土井忠生訳（1955）『ロドリゲス日本大文典』三省堂 p.608
5）森田武（1973）「捷解新語解題」『三本対照捷解新語釈文・索引・解題編』京都大学文学会
6）安田章（1980）『朝鮮資料と中世日本語』笠間書院 pp.91-100
鄭光（1991）「捷解新語解題」『改修捷解新語解題・索引・本文』太学社（Korea）
7）森田武（1973）「捷解新語解題」『三本対照捷解新語釈文・索引・解題編』京都大学文学会
8）安田章（1980）『朝鮮資料と中世日本語』笠間書院 pp.91-100
鄭光（1991）「捷解新語解題」『改修捷解新語解題・索引・本文』太学社（Korea）
9）安田章（1973）「重刊改修捷解新語解題」『三本対照捷解新語釈文・索引・解題編』京都大学文学会
10）洪充杓（1985）「方言類釈解題」『方言類釈』弘文閣（Korea）
11）語源の不明な ho-cuɯm-pu（一10オ三箇所），cjo-'u-cuɯ-ci（一15ウ二箇所），ko-'u-cjo-'u（二20ウ），suɯ-cuɯ-ru（二32ウ），cin-cuɯ-ska-na-si-ni（三17オ）は表から除外することにする。
12）鄭光（1988）『司訳院倭学研究』太学社（Korea）pp.126-143
13）大友信一（1959）「『桑韓筆語』による国語音の研究」『文芸研究』33日本文芸研究会
中村栄孝（1961）「『捷解新語』の成立・改修および『倭語類解』の成立時期について」『朝鮮学報』19輯
安田章（1978）「『方言集釈』小考」『朝鮮学報』89輯
安田章（1980）『朝鮮資料と中世国語』笠間書院 pp.272-278, p.364
宋敏（1968）「『方言類釈』日本語ハ行転写法『倭語類解』刊行時期」『李崇寧博士頌寿記念論叢』（Korea）
郭忠求（1980）「18世紀国語の音韻論的研究」『国語研究』43輯（Korea）
14）安田章（1978）「『方言類釈』小考」『朝鮮学報』89輯
15）語源の不明な cjo-'u-cuɯ-ci（上16オ），ku-zi（上26オ），cuɯ-zuɯ-mi（上41オ），zuɯ-'i-sko（下６オ），ha-zuɯ（下14ウ），sa-si-zuɯ（下42ウ），ŋku-zi-cuɯ-ku（下44オ）は表から除外することにする。
16）土井洋一・浜田敦・安田明（1959）「倭語類解考」『国語国文』28-9
17）土井忠生訳（1955）『日本大文典』三省堂 p.608
橋本進吉（1950）『国語音韻の研究』岩波書店 p.95
＿＿＿＿（1966）『国語音韻史』岩波書店 pp.102-107
大友信一（1962）「「四つ仮名」混同の音声事情」『国語学研究』２東北大学文学部
18）有坂秀世（1944）「奈良時代東国方言のチ・ツについて」『国語音韻史の研究』明世堂書店
19）亀井孝（1962）「「オ段の（長音の）開合の混亂」をめぐる一報告」『国語国文』31-6
20）菅井時枝（1971）「醒睡笑における版本の四つ仮名混乱について」『中央大学国文』14中央大学国文学会
21）北原保雄（1973）『きのふはけふの物語研究及び総索引』pp.66～75笠間書院
22）倉島節尚（1977）「四つ仮名の混乱は「ヂ・ジ」が先行した－咄本『杉楊枝』の例を手懸かりに－」『国語と国文学』54-6
23）橋本進吉（1966）『国語音韻史』岩波書店 pp.102-107
24）亀井孝（1950）「蜆縮涼鼓集を中心に見た四つがな」国語学４
25）大友信一（1957）「『捷解新語』による国語音の研究」『文化』21-4
＿＿＿＿（1958）「『客館瑣粲集』による国語音の研究」『文芸研究』29
＿＿＿＿（1962）「「四つ仮名」混同の音声事情」『国語学研究』２東北大学文学部
26）大友信一（1962）「「四つ仮名」混同の音声事情」『国語学研究』２東北大学文学部
27）菅井時枝（1971）「醒睡笑における版本の四つ仮名混乱について」『中央大学国文』14中央大学国文学会
28）倉島節尚（1977）「四つ仮名の混乱は「ヂ・ジ」が先行した－咄本『杉楊枝』の例を手懸かりに－」『国語と国文学』54-6
29）亀井孝（1950）「蜆縮涼鼓集を中心に見た四つがな」国語学４
30）金井由允（1980）「四つ仮名の混同の発生について」『群馬大学教養部紀要』14
31）城田俊（1993）『日本語の音－音声学と音韻論－』ひつじ書房 p.49
32）橋本進吉（1966）『国語音韻史』岩波書店 p.106
33）森田武（1973）「捷解新語解題」『三本対照捷解新語釈文・索引・解題編』京都大学文学会
34）安田章（1979）「『方言集釈』の日本語表記」『国語国文』48-1

（主任指導教官　多和田眞一郎）